

7

乃木希典大将の総義歯と上顎石膏模型

大野 肅英¹⁾, 羽坂 勇司¹⁾, 齋藤 眞且¹⁾, 高橋 滋樹¹⁾, 安藤 嘉明²⁾¹⁾神奈川県歯科医師会 歯の博物館, ²⁾名古屋市

乃木希典大将(以下乃木と記す)は、嘉永2年生まれ。戊辰戦争後、長府から上京し、明治18年に陸軍少将に任ぜられ、歩兵第十一旅団長として熊本に赴任した。明治20年1月よりドイツ留学1年半後に帰国。明治22年に近衛歩兵第二旅団長に任命された。明治25年2月に休職し、那須野に9カ月滞在。明治28年に陸軍中将に昇進した。明治29年、台湾総督。同年、第十一師団長。明治34年休職を願い出て、那須野で約2年の農耕生活を送った。明治37年、日露戦争が始まり現役に復帰、第三軍の司令官に任ぜられ戦地に赴いた。出征後、陸軍大将に昇進した。明治38年、旅順要塞を陥落し露将ステッセルと水師營で会見した。明治40年、学習院院長兼任。大正元年9月13日、明治天皇の大葬の日に殉死した。現在、乃木を祀った神社は、京都市、東京都、下関市、那須塩原市、函館市にある。

今回のきっかけは、京都市乃木神社に保存されている乃木の義歯の鑑定を依頼されたことから始まった。乃木日記には、軍関係者との交流が主で個人に関する事柄はあまり記載されていない。乃木は、若い時から歯が悪く、乃木日記によると竹澤、相村、桐村、神翁、牧により歯科治療を受けている。

京都市乃木神社に保存されている上下の総義歯は、乃木が常に二組を用いていた内の一組を、大正5年4月に妹の長谷川いねより寄贈されたものである。

宮司によると、東京麹町の鈴木歯科医が製作したと伝えられているが、乃木日記に鈴木の名前はない。

上顎の歯型は、乃木が明治44年英国皇帝の戴冠式参列1カ月前に、赤坂紀尾井町の木谷茂吉歯科医が印象を取り、16個複製して所縁のある人に配布した内のひとつである。しかし、乃木日記には、木谷歯科医に受診した記録はない。

調査の結果、東京都乃木神社にも同じ歯型の第三号が、東京池尻の陸上自衛隊衛生学校・彰古館には第十号が保存されていた。

京都市乃木神社に保存されている乃木の義歯と前記三個の歯型は、別々に保存され、互いにその存在が知らされていなかった。

乃木は、明治25年2月3日より9カ月間病気のため休職しているが、その理由は明らかでなかった。乃木日記には、なぜか明治21年より24年の記述が欠けている。

今回、乃木の休職を裏づける資料として、明治24年8月25日付で高嶋鞆之助陸軍大臣に提出された「義歯出来後未だ附着完全致さず、実用の為適さず候間、来る31日より右先き二週間滞京之儀、御許可被下度別紙診断書相添、此段奉願候也」や明治24年10月13日付で「上顎全部、下顎過半共義歯調整致し、——脱落の憂免じ難く——普通義歯の用を成すに至らず、これが為本務を欠き候。——本職を免ぜられたく、此段願ひ奉り候也」休職願が見つかった。

これらの資料により、乃木は43歳で上顎は無歯顎で総義歯、下顎は何本か歯が残った状態で局部義歯を装着したことが分った。

京都市乃木神社に保存されている上下の総義歯は、過去に製作されたものの一つであるが、いつ頃製作されたものかは断定できなかった。義歯床の材質は、明治期に輸入された外国製の褐色デンタルゴム(蒸和ゴム床義歯材)で、唇側や頬側の歯肉の部分はピンク色のゴム材を上に一層貼り合わせてあった。

人工歯は、明治30年より国産化された宿澤陶歯と判明した。この義歯は、技術的に優れたもので、審美性も良く現代でも充分通用する。

明治44年の乃木の歯型には、上顎前歯部に大きなフラービーガム(骨が吸収した部分へ軟組織の増殖)があり、上顎右側口蓋面には軽度の骨隆起が認められ、義歯不安定の一つの原因であったと推測できた。

義歯と歯型は、それぞれの出所や寄贈された経緯がはっきりしているが、製作された年代の違いや経年的な顎堤の変化のためか合わなかった。今回、乃木の義歯と歯型などについて調査した結果を報告する。